

宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書 第77集

# 芝ノ東窯跡発掘調査報告書

(五ヶ庄三番割 27 番地他)

2010

宇治市教育委員会





芝ノ東窯跡調査地全景（南より）





## 序

現在宇治市では、遺跡の保存と活用に向けた発掘調査や文化的景観の活用に向けた計画策定などの文化事業に取り組んでおります。昨年には、宇治川沿いの宇治川太閤堤跡が国史跡となり、宇治の文化的景観として中宇治の一带は文化庁より重要文化的景観の選定を受けました。景観への取り組みは現在も継続中ですが、選定地区の拡大が課題として残っています。このたび発掘調査をおこなった宇治市東部の五ヶ庄では、黄檗山萬福寺とその周辺が文化的景観の候補となっています。

当該地は、古くに須恵器の破片が採集されていたため、須恵器窯の存在が予測されていましたが、本発掘調査では窯跡らしき痕跡は認められませんでした。しかし、出土遺物の中に古墳の祭祀に用いられる須恵器があり、縄文土器も出土しています。これらは、かつて調査地の周辺に古墳や集落が存在したことを示唆するものです。

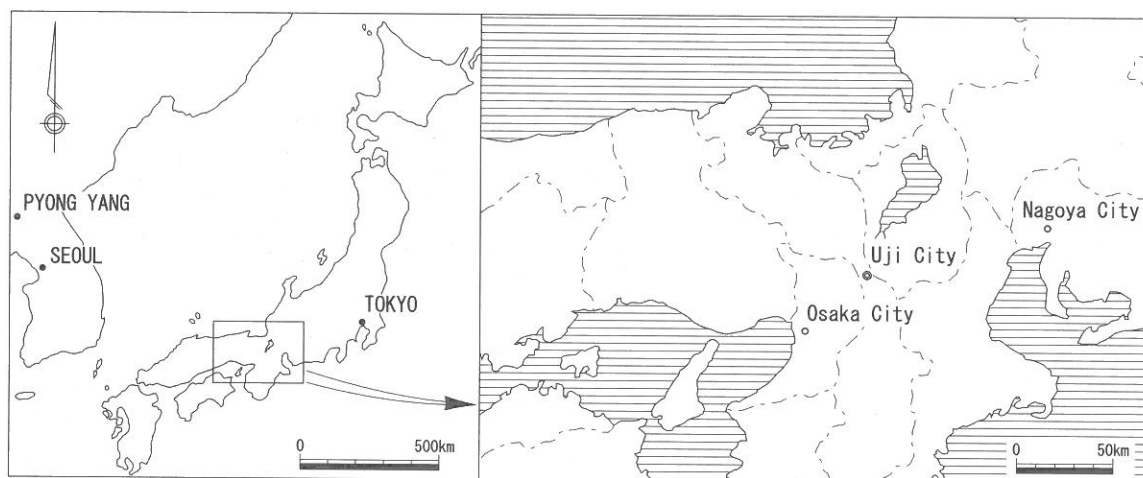
末筆になりましたが、本発掘調査に関しまして、ご協力頂きました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成 22 年 3 月

宇治市教育委員会  
教育長 石田 肇

## 例 言

1. 本書は、宇治市教育委員会が五ヶ庄三番割 27 他で平成 21 年 7 月 27 日から 8 月 31 日まで実施した芝ノ東窯跡発掘調査報告書（宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書第 77 集）である。
2. 本書で使用する座標は、I T R F（国際地球基準座標系）に準拠した世界測地系国土座標第 VI 系を用い、地図中で方位記号の指し示す方向は、座標北である。また、高さの基準面には、東京湾平均海面（T.P.）を用いた。
3. 本書の土層色調表記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・日本色彩研究所色標監修）第 24 版（2002）に従った。
4. 本書の遺構名称表記は、S D（溝）、S K（土坑）、P（ピット）を用いた。
5. 本書では、芝ノ東窯跡について、山田良三 1973「寺院の造立」『宇治市史』1 を参考とした。
6. 本書収録の遺物写真は、寿福写房（代表 寿福 滋）に委託した。
7. 本書の編集・執筆は、宇治市都市整備部歴史まちづくり推進課文化財保護係が担当し、実務を横田真吾がおこなった。



宇治市の位置

# 本文目次

## I. はじめに

1	報告の目的	1
2	調査の原因	2
3	調査の体制	3
3	調査の経過	3

## II. 地理的・歴史的環境

1	芝ノ東窯跡の地理的環境	4
2	五ヶ庄地区の歴史的環境	5

## III. 調査の成果

1	基本層序	6
2	検出遺構	7
3	出土遺物	8

IV.	まとめ	9
-----	-----	---

## 挿 図 目 次

第1図	調査地位置図	1
第2図	調査地拡大図	2
第3図	調査区配置図	3
第4図	宇治市と周辺の主要遺跡	5
第5図	各調査区の基本層序	6
第6図	第1調査区平面・断面図	7
第7図	第2調査区平面・断面図	8
第8図	第3調査区平面・断面図	8
第9図	遺物実測図	9

## 図 版 目 次

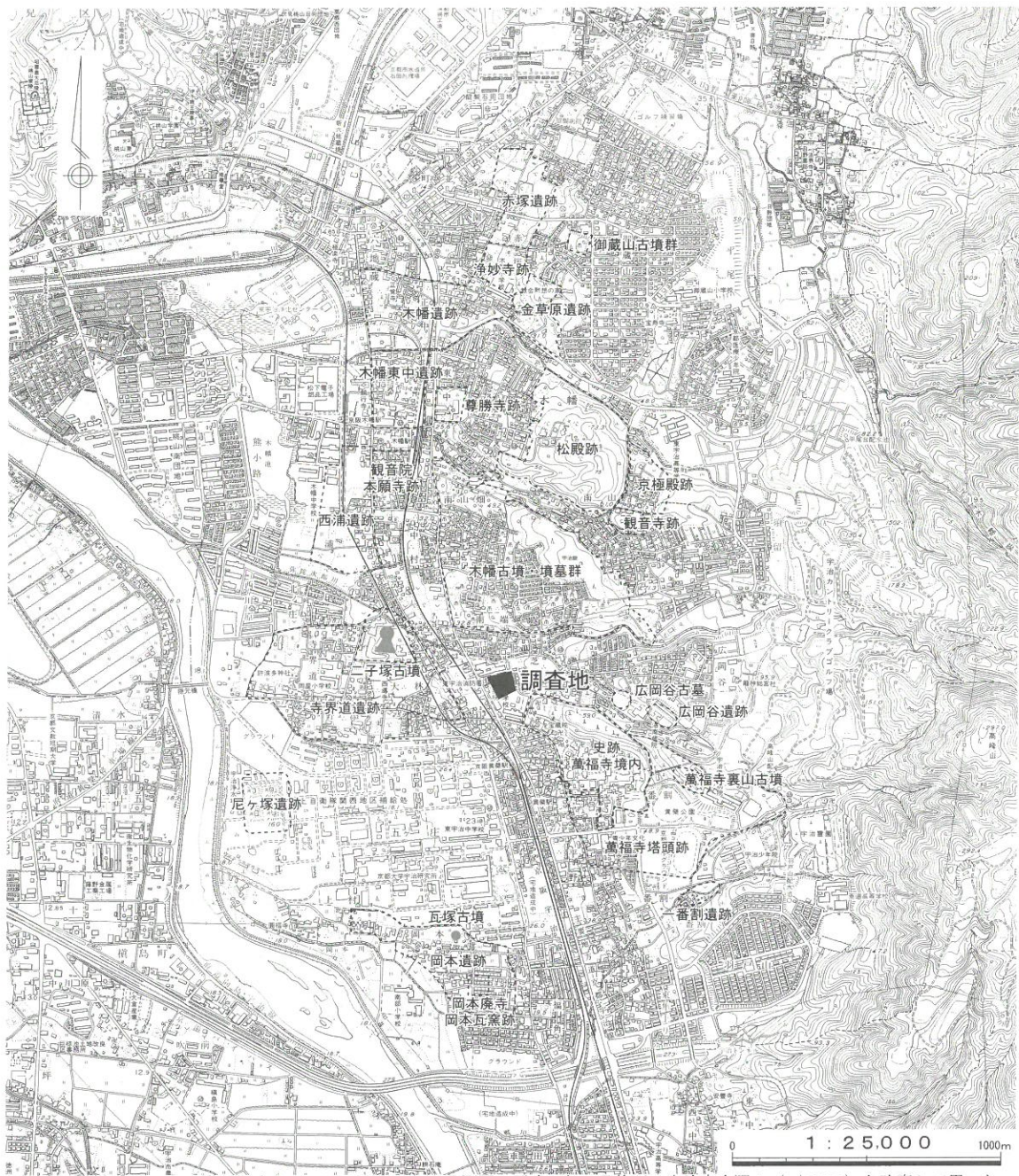
PL . 1	調査地全景
PL . 2	第1調査区
PL . 3	第2調査区
PL . 4	第3調査区
PL . 5	検出遺構
PL . 6	土層断面
PL . 7	作業風景
PL . 8	出土遺物



# I. はじめに

## 1 報告の目的

本書は、京都府宇治市五ヶ庄三番割 27 他で計画された宇治小学校の建替工事に先立ち、宇治市教育委員会が実施した発掘調査の内容と成果を報告するものである。



作図にあたっては、昭和55年7月測図、平成2年2月修正の宇治市全図1 (1/10000) を改変して用いた。

第1図 調査地位置図



## 1. はじめに

## 2 調査の原因

平成21年7月15日、本市教育委員会は、芝ノ東窯跡の範囲にある宇治市五ヶ庄三番割27他において、文化財保護法第94条第1項の規定に基づき、宇治小学校の建替工事を行う旨の埋蔵文化財発掘通知を京都府教育委員会へ提出した。その後、7月24日付で京都府教育委員会教育長田原博明から発掘調査実施の通知を受け、記録作成のための発掘調査を宇治市教育委員会が実施した。現地の調査は、宇治市都市整備部歴史まちづくり推進課文化財保護係が担当した。今回計画の宇治小学校建替工事では、現校庭部分に新校舎が建設される予定であった。新校舎は基礎が深く、その範囲が校庭全体におよぶため、地下に窯跡などの遺構があった場合、壊滅する恐れがあった。そのため、まず建替後の範囲に合わせて細長い調査区を3ヶ所設定し、遺構が検出され次第、校庭中央方面へ順次拡張していくことにした。調査区は、開発範囲の南、北、西にそれぞれ配置した。



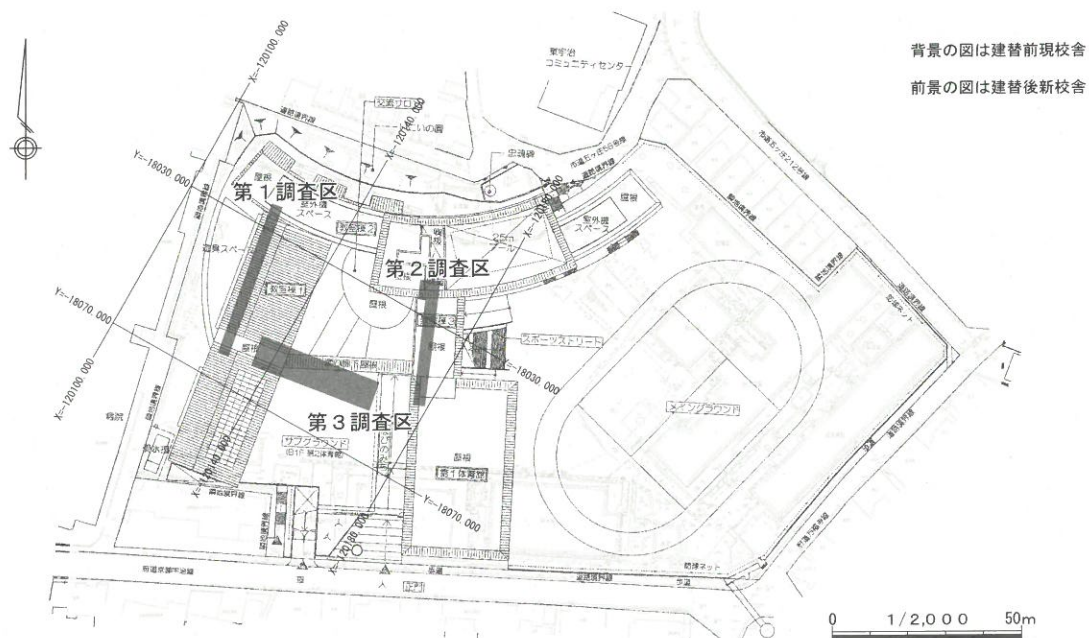
第2図 調査地拡大図

### 3 調査の体制

本発掘調査における主体者は宇治市教育委員会であり、責任者は石田肇教育長である。発掘調査事務局は、宇治市都市整備部歴史まちづくり推進課に置かれ、木下健太郎課長のもと、杉本宏主幹、荒川史主査、永野宏樹調査員、横田真吾調査員が調査を担当した。現地では、横田が主に調査を担当した。発掘調査の掘削および測量の作業は、マエダリメインズに委託され、発掘技術員は藤田明弘、計測技術員は前田哲典、作業員長は桐山登であった。

### 4 調査の経過

現地での調査は、平成21年7月29日より、各調査区の設定と第1調査区の重機掘削から開始した。第1調査区の掘削は同日中に終了した。第3調査区の掘削も翌30日に終わり、残る第2調査区の重機掘削は、8月3日におこなった。第2調査区については、調査区の東端で溝が検出されたことから、遺構の性格確認のため、4日に東側へ調査区を拡張した。また、第3調査区についても、遺物包含層より須恵器と鉄釘が出土したことから、11日に東側へ調査区を拡張した。遺構検出作業は、各調査区の重機掘削後、随時おこなった。検出の結果、各調査区ともに自然流路以外、明確に遺構と認識できるものが無かった。検出された遺構は、各調査区で全面の遺構検出後にそれぞれ半裁し、埋土の状況を確認したのち完掘した。各調査区の完掘状況写真撮影は、第1調査区が8月7日、第2調査区が11日、第3調査区が17日にそれぞれ実施した。全調査区の遺構を完掘した後、全体の写真撮影は18日に宇治小学校屋上よりおこなった。翌19日より、調査区の埋め戻しおよび校庭復旧作業と測量を開始し、28日に終了した。調査地を囲うフェンスも同28日に撤去した。事務所2棟を撤去した8月31日、現地から完全に撤収した。



第3図 調査区配置図

## Ⅱ. 地理的・歴史的環境

### 1 芝ノ東窯跡の地理的環境

芝ノ東窯跡は、かつて山田良三氏が『宇治市史』第1巻で「宇治小窯跡」として紹介したことから知られるようになった遺跡である。市史では、宇治小学校校庭の拡張工事に携わった人々の話として、工事の際に校庭東端で多量の木炭灰や須恵器が出土した事実が紹介されている。現校庭の東端は、削平のため現在は平坦であるが、削平を受けていない校庭東側の傾斜を見る限り、本来は東から西へと緩やかに下る地形であったと考えられる。山田氏によれば、市史編纂当時(昭和40年代)も、この周辺に奈良時代の須恵器が散布していたとのことである。しかし、実際にこの場所に窯跡があるか否かについて、発掘調査では未確認であった。

### 2 五ヶ庄地区の歴史的環境

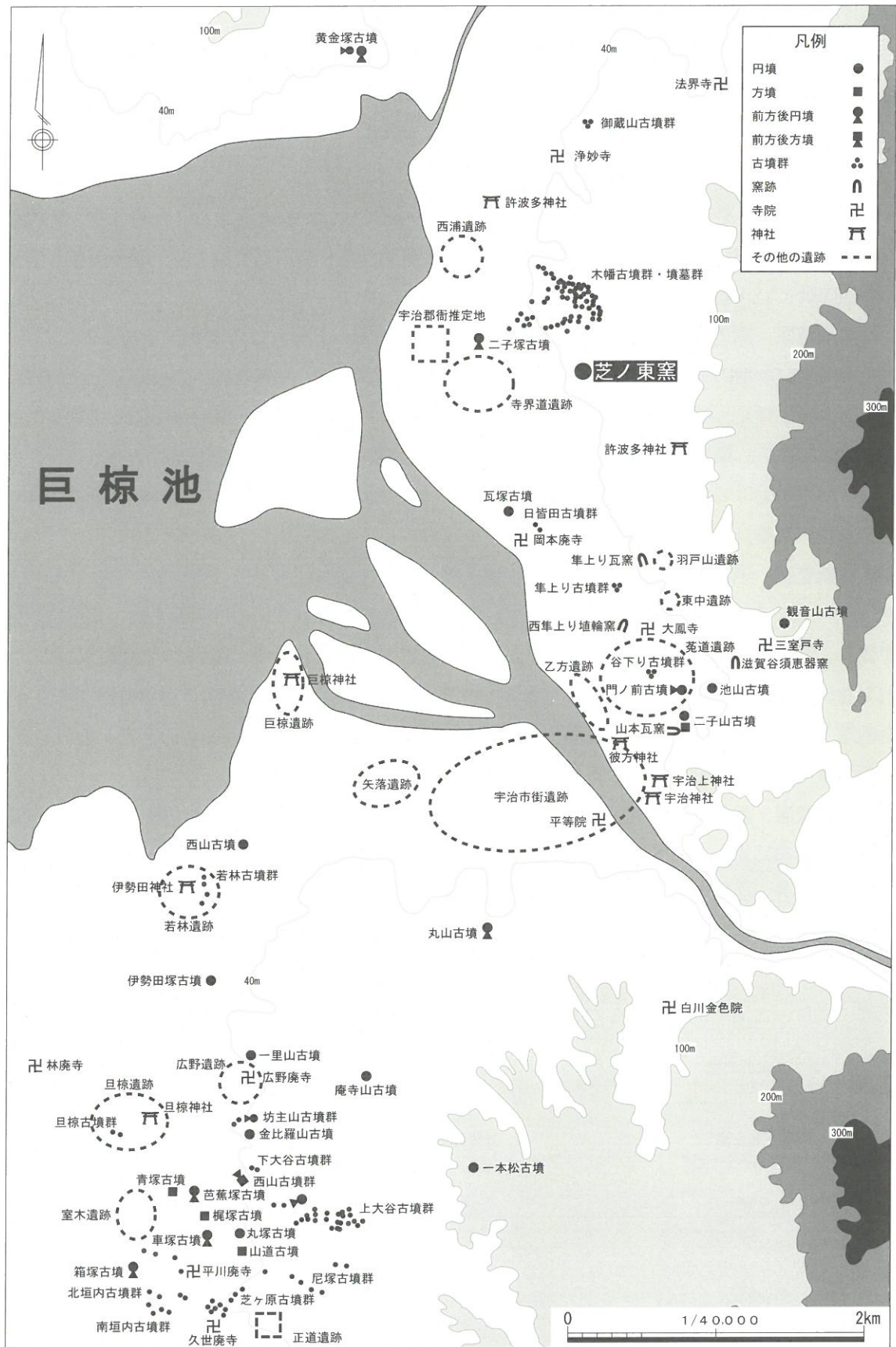
五ヶ庄は、古くは北の木幡に包括される地域であったことが産土神である許波多神社の存在から知られ、地名としての五ヶ庄は文献史料により中世まで遡る。また、五ヶ庄とは公家の近衛家が中世から近世にかけて領有した荘園の岡屋荘や富家殿といった家領を指す呼称でもある。

近衛家領以前の五ヶ庄の事柄については、文献史料に残っていないため、多くのことは不明である。しかし、現在では発掘調査が行われた遺跡によって、古代ないしそれ以前の様子を窺い知ることができる。五ヶ庄では、平坦な地形が広がるその場所に遺跡の多くが存在する。遺物としては、**二子塚古墳**から後期旧石器時代のナイフ形石器が出土しているが、遺構に伴うものではなく、当時の様子は不明である。遺構としては、**寺界道遺跡**において縄文時代晩期の貯蔵穴や土器棺を検出しており、縄文時代にはこの場所で人々が生活していたのは確実である。寺界道遺跡の東方、今回の調査地でも遺物包含層中より縄文時代早期の土器片が出土していることから、この一帯に縄文時代の集落があった可能性がある。

弥生時代の五ヶ庄については、遺構が未発見のため様子が明らかでない。古墳時代になると、中期の**瓦塚古墳**や後期の**二子塚古墳**など多くの古墳が築かれた。この内、二子塚古墳は、旧山背国域で最大規模の前方後円墳であり、時期的に継体大王と関係がある人物の墓と考えられている。また、二子塚古墳は北東の木幡地区にある**木幡古墳群**との関係が注目され、このことから五ヶ庄はかつて木幡の範囲に含まれていた場所と考えられる。

飛鳥時代には、寺界道遺跡で集落が確認され、奈良時代の土器や硯も出土していることから、遺跡周辺に識字層の居住が想定される。寺界道遺跡の西方は宇治郡衙推定地であり、両者の関係は明らかでないが、いずれにせよ寺界道遺跡が五ヶ庄における中心的な集落であったと考えて大過ないだろう。この集落とその当方にある奈良時代の須恵器が出土したという**芝ノ東窯跡**の関係については、双方の情報が少なく、ほぼ同時期という以外不明である。





第4図 宇治市と周辺の主要遺跡

### Ⅲ. 調査の成果

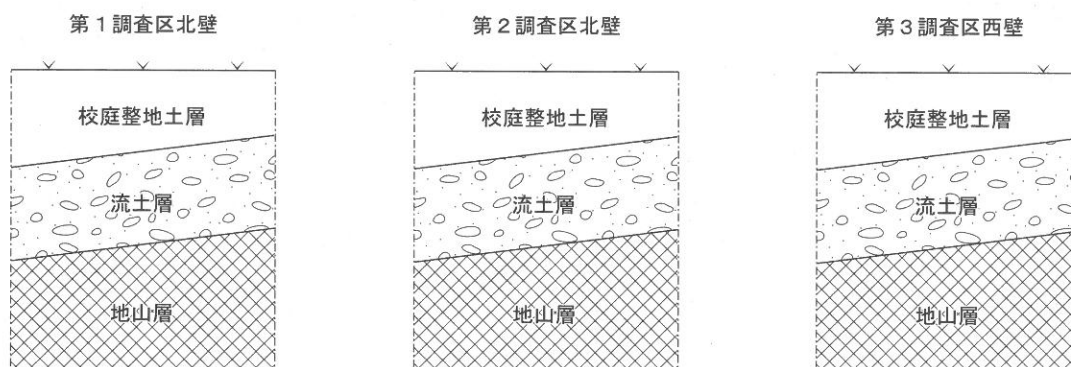
#### 1 基本層位

本調査での基本層位は、第1調査区から第3調査区まではほぼ同様であった。上層より、現代の校庭整地土層、縄文時代から古墳時代の土器や礫を多量に含む暗褐色の流土層、礫を少量含む褐色の地山層という順になっていた。

**第1調査区** 調査区の北壁を観察すると、校庭整地土層（1層）はほぼ水平であるのに対し、流土層（2層）と地山層（3層）は東から西へと下っていた。調査区の西端より29mの地点からは、東へ流土層が無く、地山層上端が水平になっていたが、これは現代の校庭整地に際して削平を受けた結果である。削平を受けていない校庭より東方の傾斜が東から西へ緩やかに下っていたことから、削平を受けて水平になっている箇所も本来はこのように東から西へ下る緩傾斜地形であったと考えられる。

**第2調査区** 第1調査区と同様、校庭整地土層（1層）はほぼ水平で、流土層（2、3層）と地山層（4、5層）は東から西へと下っていた。調査区西端より6mの地点からは、東へ流土層が無く、地山層上端が水平になっていたが、これも第1調査区と同様、現代の校庭整地に際して削平を受けた結果である。調査区北壁を観察すると、流土層と地山層を削る自然流路（SD4）を確認できた。この流路は、流土層出土の須恵器により、古墳時代以降のものと考えられるが、その下限年代については不明である。

**第3調査区** 調査区北壁を観察すると、第1、2調査区と同様、校庭整地土層（1層）はほぼ水平であるのに対し、流土層（2層）と地山層（3層）は東から西へと下っていた。調査区東壁を観察すると、校庭整地土層、流土層、地山層はそれぞれほぼ水平であったが、西壁では流土層と地山層が北から南へ緩やかに下っていた。また、東西両壁では流土層と地山層を削る自然流路（SD16、19）を確認できた。これらの流路は、第2調査区のSD4と同様、流土層出土の須恵器により、古墳時代以降のものと考えられる。



第5図 各調査区の基本層序



## 2 検出遺構

**第1調査区** 土坑とピットを各1基検出した。

土坑（SK1）は、調査区西寄りに位置する。北側半分が調査区外にかかるため、正確な規模は不明である。しかし、平面的にほぼ半円が見えていることから、本来の形状は直径2.73 m、深さ0.8 mを測る円筒形と判断できる。その埋土中には、江戸時代から近代までの陶磁器小片が含まれ、これらは土坑が掘り込まれた年代の下限を示すものと考えられる。また、調査区北壁の観察によって、埋土（8、9層）が掘り込まれている状況が看取可能であり、SK1は造られてから最低でも1回は掘り直されたことがわかる。その機能については判断が難しいが、掘り直しが認められることから、不要な物を廃棄する穴であった可能性がある。

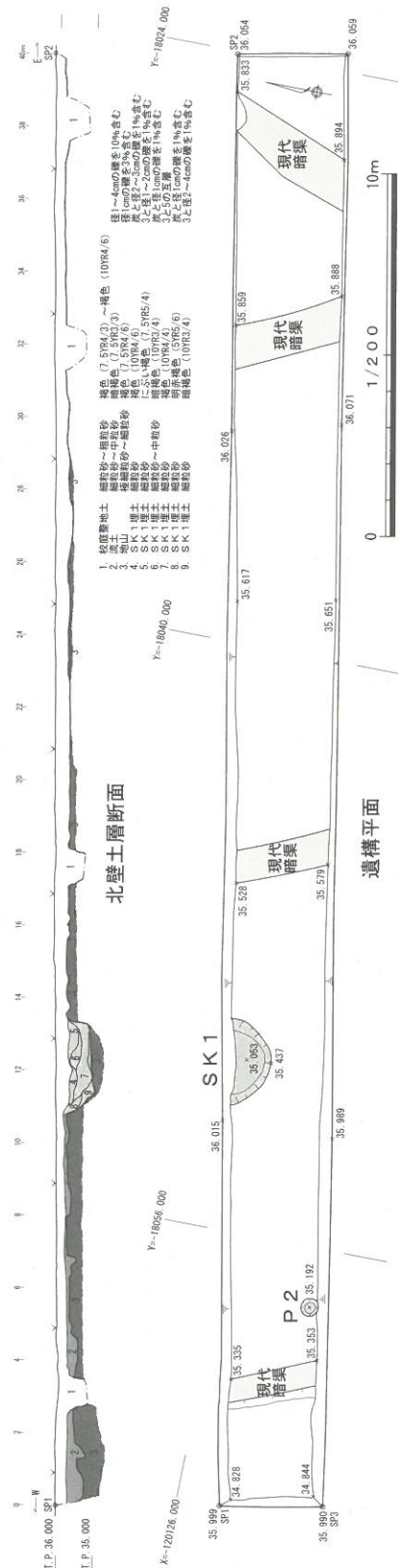
ピット（P2）は、土坑（SK1）の南側に位置している。直径0.28 m、深さ0.15 mを測る。埋土は1層であり、遺物は認められなかった。

**第2調査区** 溝2基とピット1基を検出した。

溝（SD3）は、調査区の東端に位置する東西方向の溝である。東から西へ緩やかに下っている。幅0.9 m、深さ0.25 mを測る。埋土から、近現代のものと思われる金属片が出土している。溝上端の形状が整っていないことから自然流路と考えたが、全体の形状は不明であり、人工的な溝の可能性もある。

溝（SD4）は、調査区西寄りに位置する南北方向の溝である。幅4.1 mを測る。深さについては、上端より1 m以上下がることは明らかだが、底面までの深さは不明である。埋土から、遺物は認められなかった。埋土は4層であり、主として礫を多く含む粗砂である。全体の形状は不明であるが、溝の断面形状や埋土の性質および色調から自然流路と考えられる。

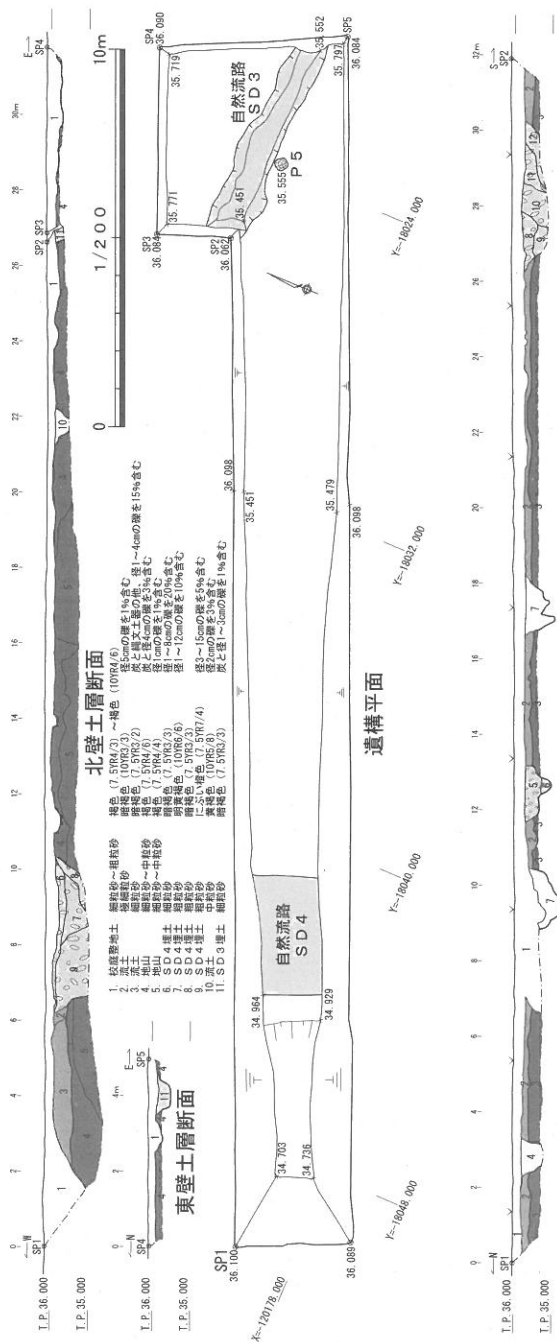
ピット（P5）は、溝（SD3）の南側に位置している。直径0.3 m、深さ0.23 mを測る。埋土は1層であり、遺物は認められなかった。



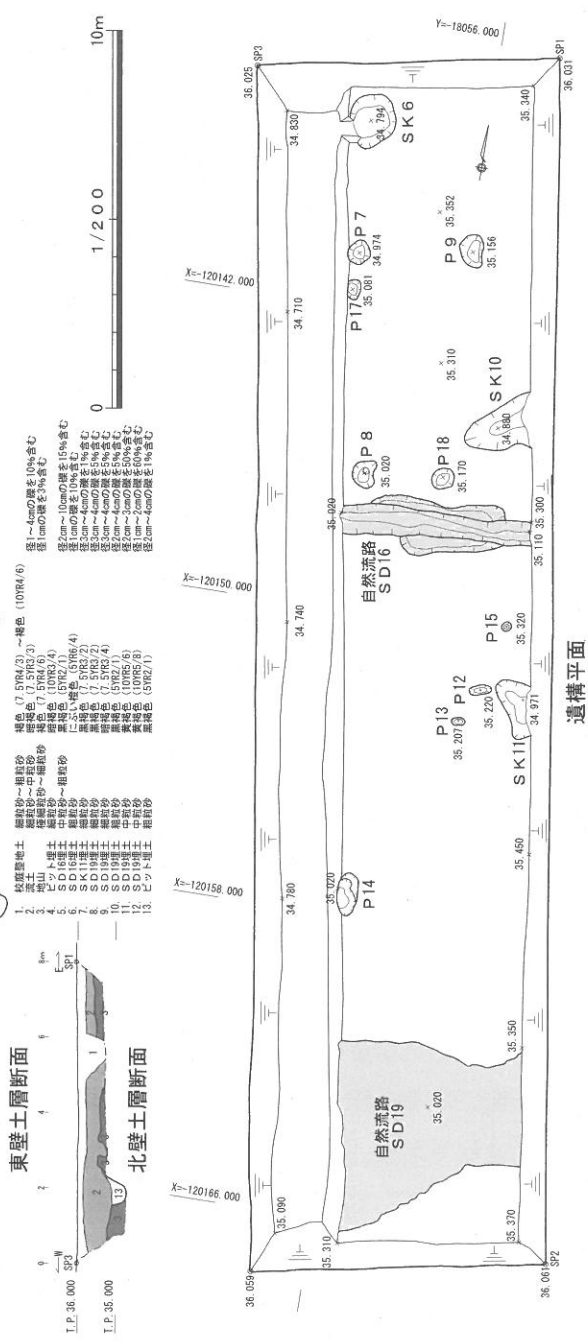
第6図 第1調査区平面・断面図

III. 調査の成果

**第3調査区** 土坑3基と溝2基の他、ピット9基を検出したが、埋土に遺物は認められなかった。この内、土坑やピットについては、埋土に植物の痕跡が見られるものがあり、遺構の可能性が低いため、ここでは溝2基について記述する。溝(SD16)は、調査区の中央に位置し、東西方向に伸びる。東から西へ緩やかに下る。幅0.69m、深さ0.31mを測る。形状と埋土より自然流路と考えられる。溝(SD19)は、調査区南寄りに位置し、東西方向に伸びる。幅5.1mを測る。深さは、上端より2m以上下がることは明らかだが、底面までの深さは不明である。埋土は礫を多く含む粗砂である。SD4と同様の自然流路と考えられる。



第7図 第2調査区平面・断面図



第8図 第3調査区平面・断面図

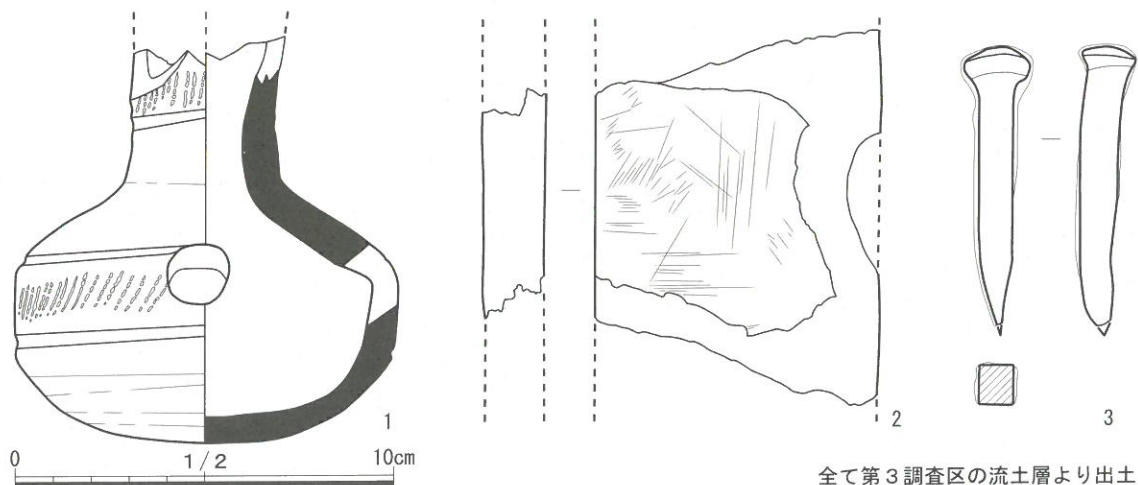
### 3 出土遺物

発掘調査で出土した遺物は、コンテナバット1箱分である。縄文土器、須恵器、陶器、磁器、砥石、鉄釘が出土した。この内、陶磁器は第1調査区の土坑埋土（SK1）、縄文土器は第2調査区の流土層、その他は第3調査区の流土層から、それぞれ出土した。遺物の多くは小片である。ここでは、図化できた3点について記述する（第9図）。

1は、須恵器の甗である。頸部より下が残る。最大径10.05cm、残存高10.85cmを測る。体部上半より上は回転ナデ調整、下は回転ヘラケズリ調整である。頸部と体部の中央には凹線がつけられ、その内側に刻み目列点文が施されるが、その上から再び回転ナデ調整をおこなっている。

2は、粘板岩の砥石である。全体の中ほどが残る。残存長10cm、幅7.5cm、厚さ1.7cmを測る。表面は擦痕が見られ滑らかであるが、裏面は平滑に整形されていない。原料の粘板岩は、宇治川上流の天ヶ瀬ダム周辺に露頭が確認できる。

3は、先端部を欠損した鉄釘である。残存長7.5cm、頭部幅1.7cm、頭部厚1.4cmを測る。断面の形状は、ほぼ正方形である。全体の形状より鍛造品と考えられる。



全て第3調査区の流土層より出土

第9図 遺物実測図

## IV. まとめ

本調査では、芝ノ東窯の痕跡は認められず、灰原や奈良時代の須恵器も出土しなかった。その理由としては、校庭造成による削平で窯跡が壊滅したという以外、今回設定した調査区より南東に窯跡および灰原が残っていると考えられ、今後も周囲を掘削する際には注意が必要である。

調査の主要な成果としては、調査地西半に縄文土器や古墳時代の須恵器を含む流土層が残ることから、かつて調査地周辺に縄文時代の集落や古墳等が存在したと考えられる点が挙げられる。また、校庭整地による削平以前の北東より南西へと緩やかに下る旧地形が、調査地西側に残っていると判明した点も、今後周辺の調査をおこなう上で貴重な情報である。





# 図版

遺構……………PL. 1～5

土層……………PL. 6

作業……………PL. 7

遺物……………PL. 8









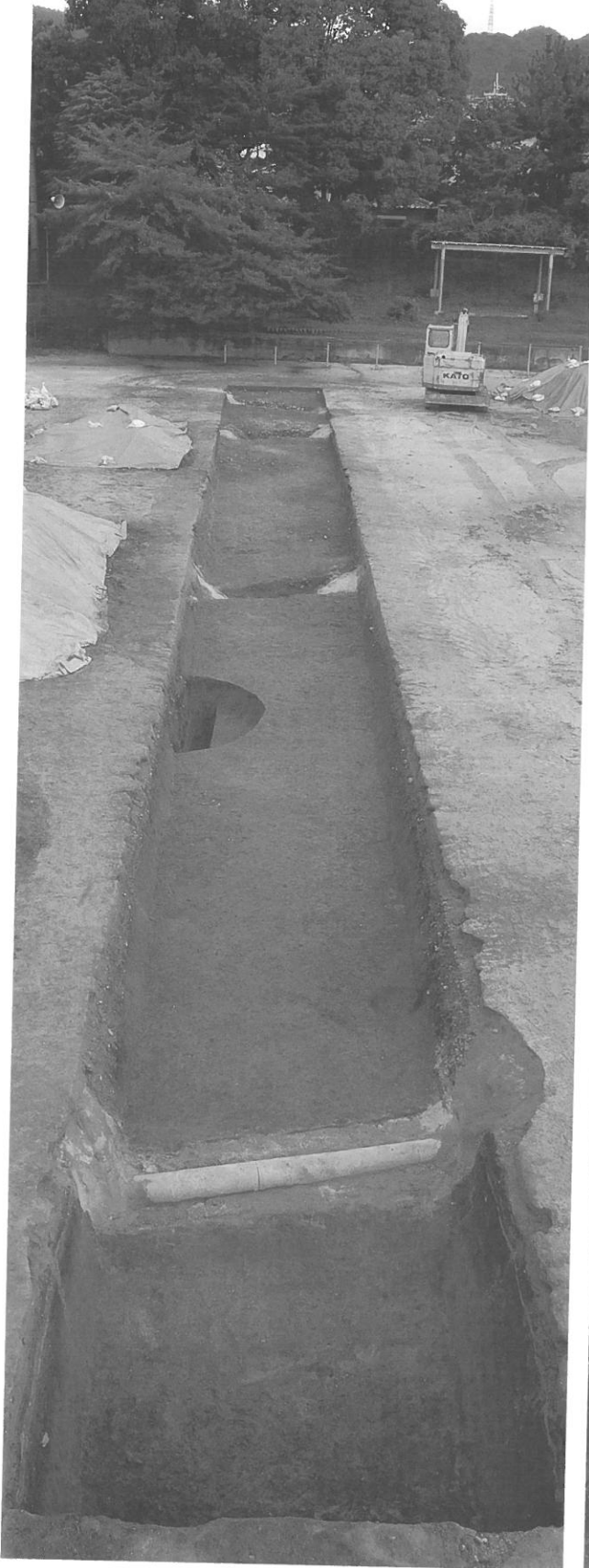
掘削前現地（南より）



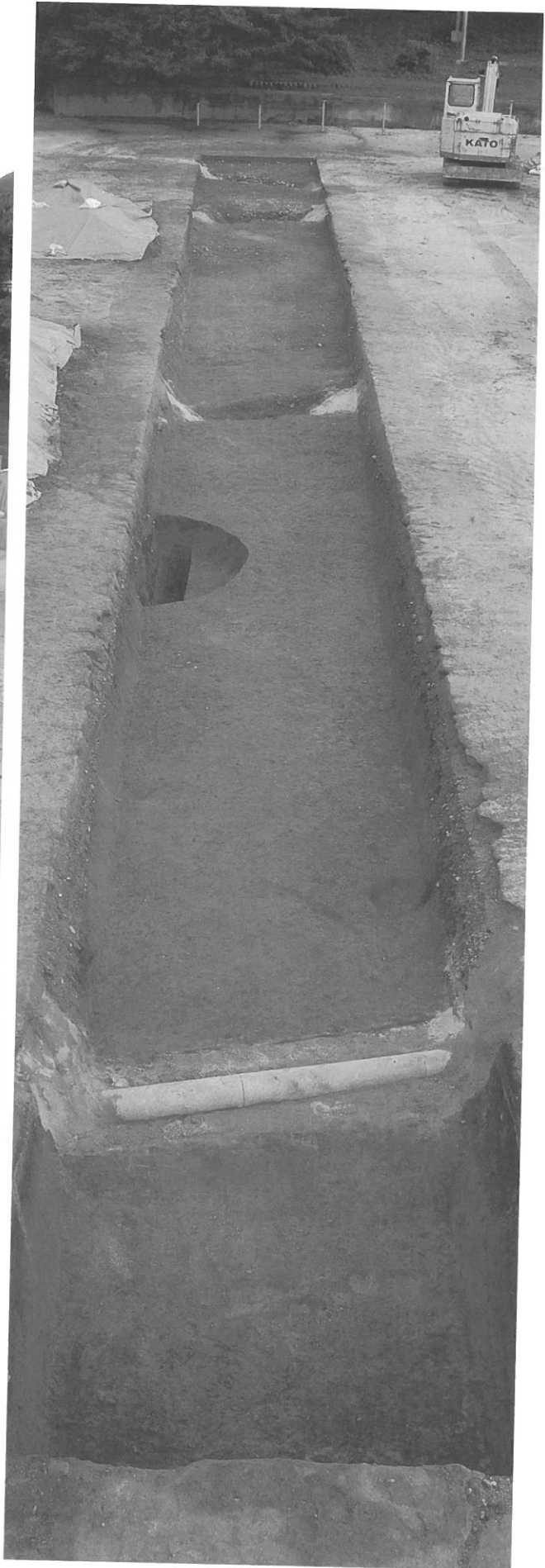
掘削後現地（南より）

PL. 2

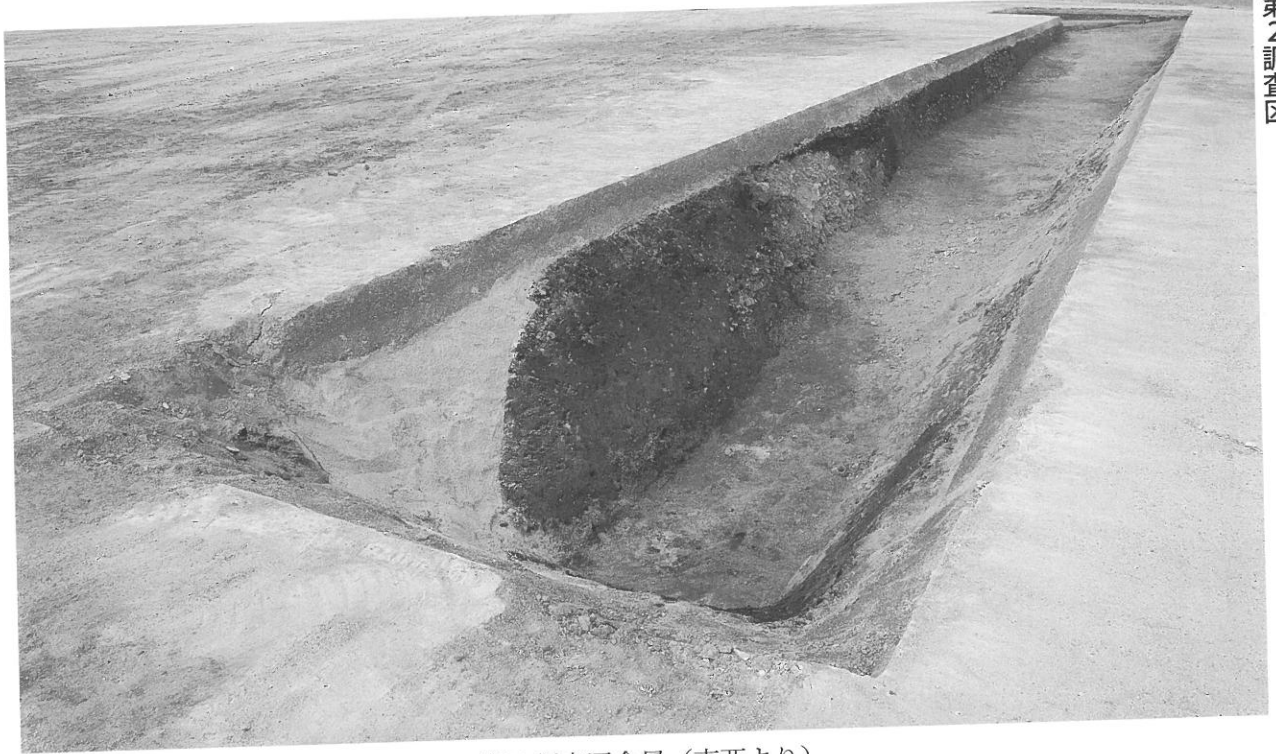
第1調査区



第1調査区全景（西より）



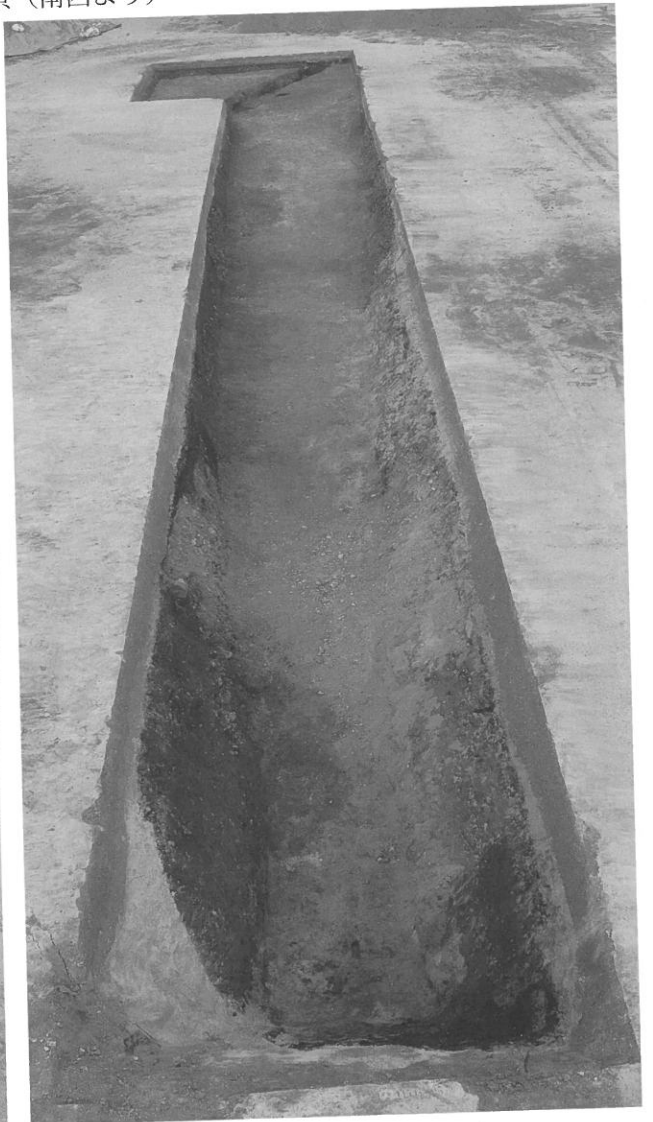
第1調査区完掘（西より）



第2調査区全景（南西より）



第2調査区全景（西より）



第2調査区完掘（西より）



PL.4

第3調査区



第3調査区全景（南より）

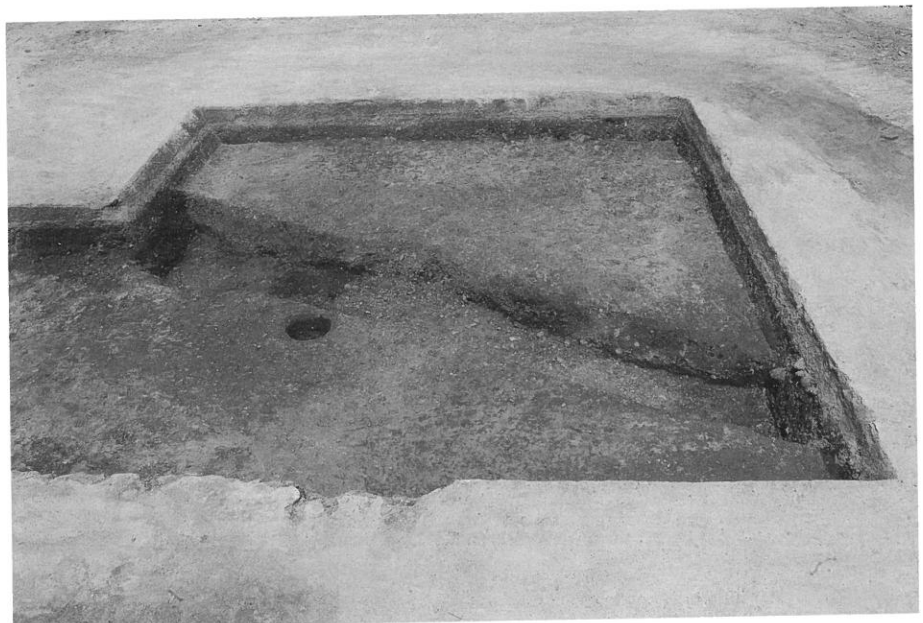




第1調査区  
土坑S K 1 検出(南より)



第1調査区  
土坑S K 1 半切(南より)

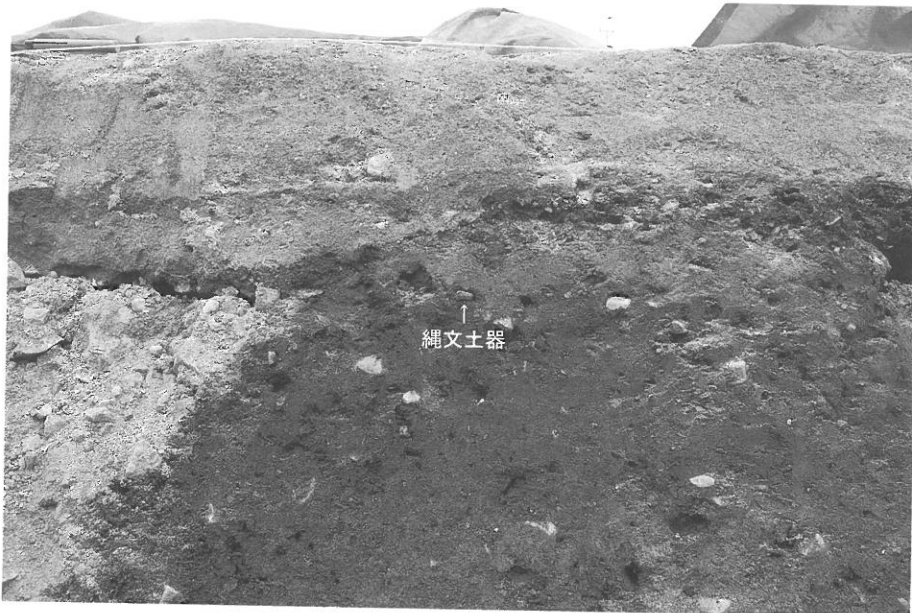


第2調査区  
流路S D 3 完掘(南より)

PL.6  
土層断面



第1調査区西壁



第2調査区南壁



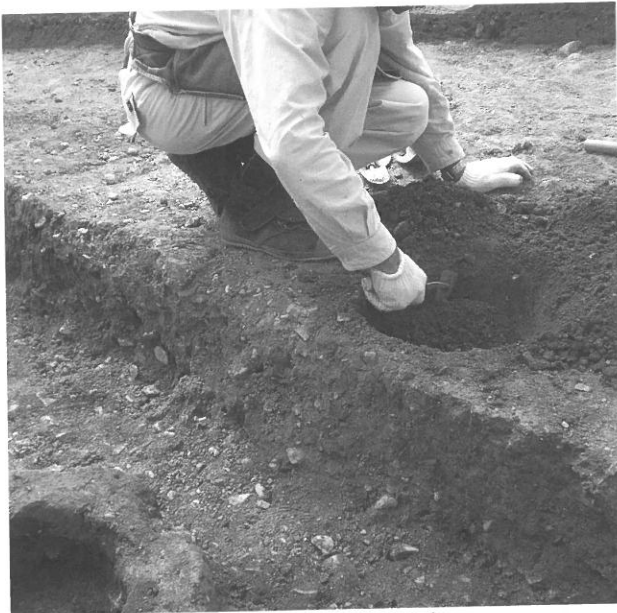
第3調査区東壁



重機掘削（北西より）



遺構検出（南西より）



遺構掘削（南東より）



壁面実測（北より）



撮影準備（北西より）



現状復旧（南西より）

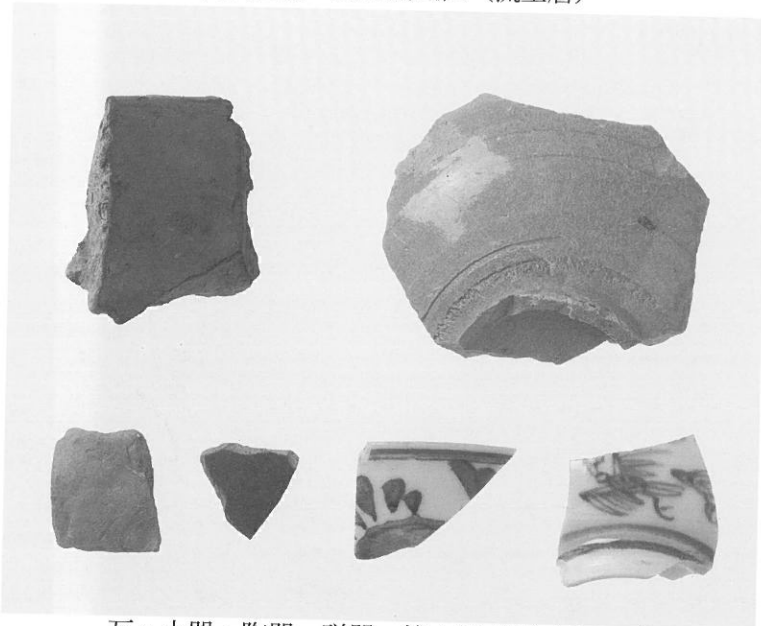




縄文土器 第2調査区 (流土層)



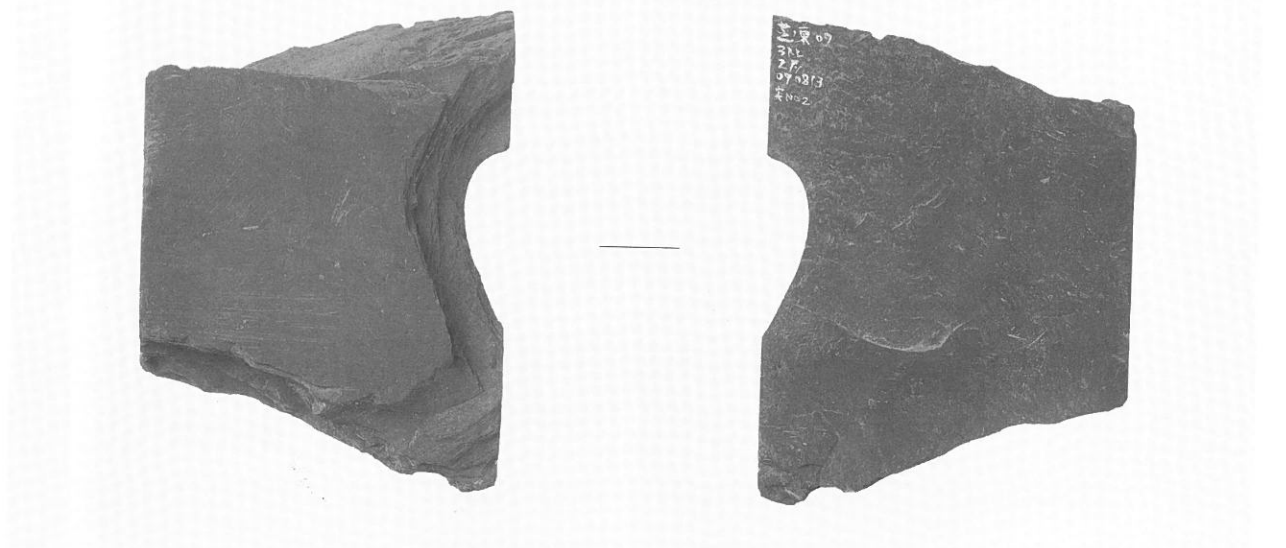
須恵器 第3調査区 (流土層)



瓦・土器・陶器・磁器 第1調査区 (SK1)



鉄釘 第3調査区 (流土層)



砥石 第3調査区 (流土層)



## 報告書抄録

ふりがな	しばのひがしようせきはくつちようさほうこくしょ
書名	芝ノ東窯跡発掘調査報告書
副書名	
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第77集
編著者名	横田真吾
編集機関	宇治市都市整備部 歴史まちづくり推進課
所在地	〒611-8501 京都府宇治市宇治琵琶33
発行者	宇治市教育委員会
所在地	〒611-8501 京都府宇治市宇治琵琶33
発行年月日	西暦2010年3月31日

所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	期間	面積	調査原因
芝ノ東窯跡	五ヶ庄 三番割 27他	26204	63	34度 55分 00秒	135度 48分 09秒	20090727 ～ 20090831	546㎡	小学校 建替
所収遺跡名	種別	主要時代	主要遺構		主要遺物		特記事項	
芝ノ東窯跡	須恵器窯	奈良か	土坑、流路		縄文土器、須恵器、 砥石、鉄釘		グラウンド造成時に 東側の斜面を削平	
所収遺跡名	成果要約							
芝ノ東窯跡	調査地西側は、本来の地形傾斜が残り、削平などの改変を受けていないことが明らかとなった。 須恵器窯跡が想定された調査地東側は、削平が著しく平坦になっていた。							



# 芝ノ東窯跡発掘調査報告書

宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書 第77集

発行日 2010年3月31日

発行者 宇治市教育委員会

〒611-8501 京都府宇治市宇治琵琶33番地  
編 集 宇治市都市整備部 歴史まちづくり推進課

〒611-8501 京都府宇治市宇治琵琶33番地

T E L 0774 - 21 - 1602

F A X 0774 - 21 - 0400

e-mail rekimachi@city.uji.kyoto.jp

印 刷 有限会社 新進堂印刷所

〒611-0021 京都府宇治市宇治妙楽9





